平成 23 年 11 月 13 日

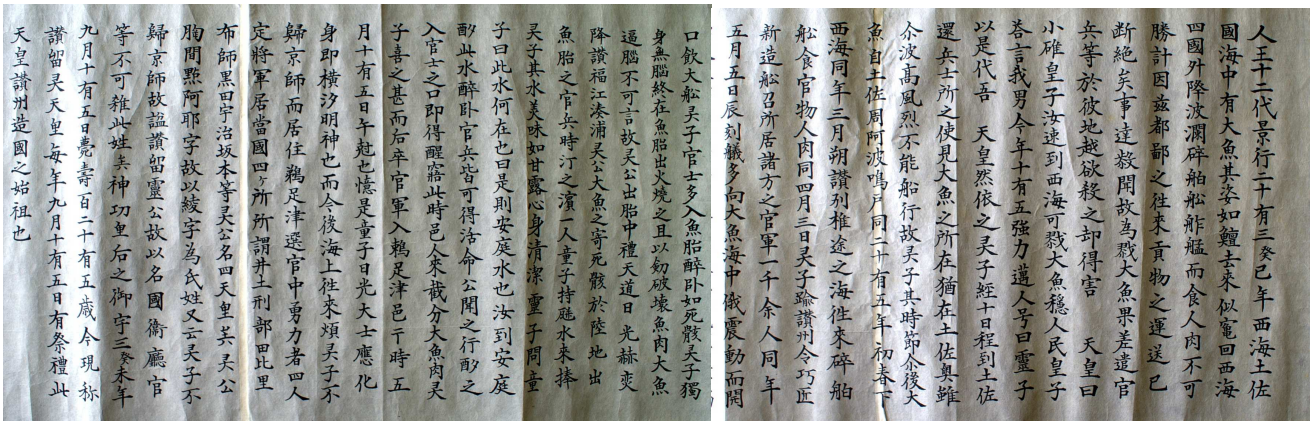
香川中務輔信景家系図　調査報告書

丸谷憲二

1　はじめに

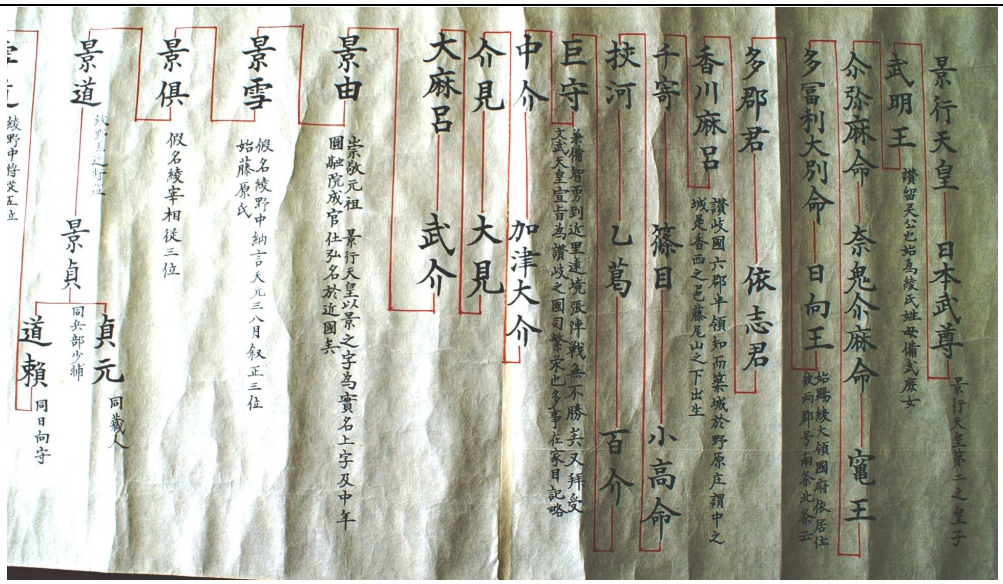
鎌田共済会郷土博物館（香川県坂出市本町）所蔵の系図である。初代主事・岡田唯吉の収録によるものであり、岡田唯吉は『香川氏系譜(景行天皇御孫　武明王後胤)二七ノ二』と分類している。原本　多度津町　香川照栄堂蔵、昭和十一年三月二十一日調査部写とある。

2　香川中務輔信景家系図



人王十二代景行二十有三癸巳年、西海土佐國海中有大魚。其姿如鱣。去来似亀（宀＋亀）。回西海四国外際波瀾碎舶舩舴艋、而食人肉不可勝計。因茲都鄙之往来、貢物之運送、已断絶矣。事達数聞。故為戮大魚、果差遣官兵等於彼地、越欲殺之、却得害。天皇、曰小碓皇子。汝速到西海、可戮大魚穏人民。皇子荅言。我男。今年十有五。強力邁人。号曰霊子。以是代吾。天皇然。依之灵子経十日程到土佐還兵士所、之使見大魚之所在、猶在土佐奥雖。尒波髙風烈、不能船行。故灵子、其時節。尒後大魚自土佐周阿波鳴戸、同二十有五年初春下西海、同年三月朔讃州椎途之海、往来碎舶舩、食官物人肉。同四月三日、灵子、踰讃州、令巧匠新造舩、召所居諸方之官軍一千余人。同年五月五日辰刻、艤多向大魚。海中俄震動。

而開口飲大舩。灵子官士多入魚胎、醉臥如死。骸灵子獨身無脳。終在魚胎、出火燒之、且以劔破壊魚肉。大魚逼脳不可言。故灵公、出胎中、禮天道日光赫変。降讃福江湊、浦灵公大魚之寄死骸於陸地、出魚胎之官兵。時汀之濵一人童子。持瓶水來捧灵子。其水美味如甘露。心身清潔。霊子問童子曰。此水何在也。曰。是則安庭水也。汝到安庭、酌此水醉臥官兵、皆可得活命。公聞之、行酌之入官士之口、即得醒寤。此時邑人來截分大魚肉。灵子、喜之甚。而后卒官軍、入鵜足津邑。于時五月十有五日午尅也。憶是童子、日光大士應化身、即横汐明神也。而今後海上往來煩。灵子、不歸京師。而居住鵜足津。選官中勇力者四人、定将軍、居當国四ケ所。所謂井土刑、部田比（高松市多肥）里布、師黒田宇治、坂本等灵公。名四天皇矣。灵公陶間點阿耶字。故以綾字為氏姓。又云灵子不歸京師、故諡讃留靈公、故以名。國衛廳官等、不可雑此姓。矣神功皇后之御宇三癸未年九月十有五日、薨壽百二十有五歳。今現称讃霊灵天皇。毎年九月十有五日有祭禮。此天皇讃州造国之始祖也。



景行天皇

日本武尊　景行天皇第二之皇子

武明王　　讃留夭公也始為綾氏姓母備武鹿女

尒弥麻命

奈鬼尒麻命

竈王

多冨利大別命

日向王　　始賜綾大領國府依居住彼両郡号南条北条云

多郡君

依志君

香川麻呂　讃岐国六郡半領知而築城於野原庄謂中之城是香西之邑藤尾山之下出生

千寄

篠目

小高命

挾河（寒川のこと）

乙葛

百介

巨守　　兼備智勇到近里遠境張陣戦無不勝矣又拝受文武天皇宣旨為讃岐之國司繁栄也多事在家目記略

中介

加津大介

介見

大見

大麻呂

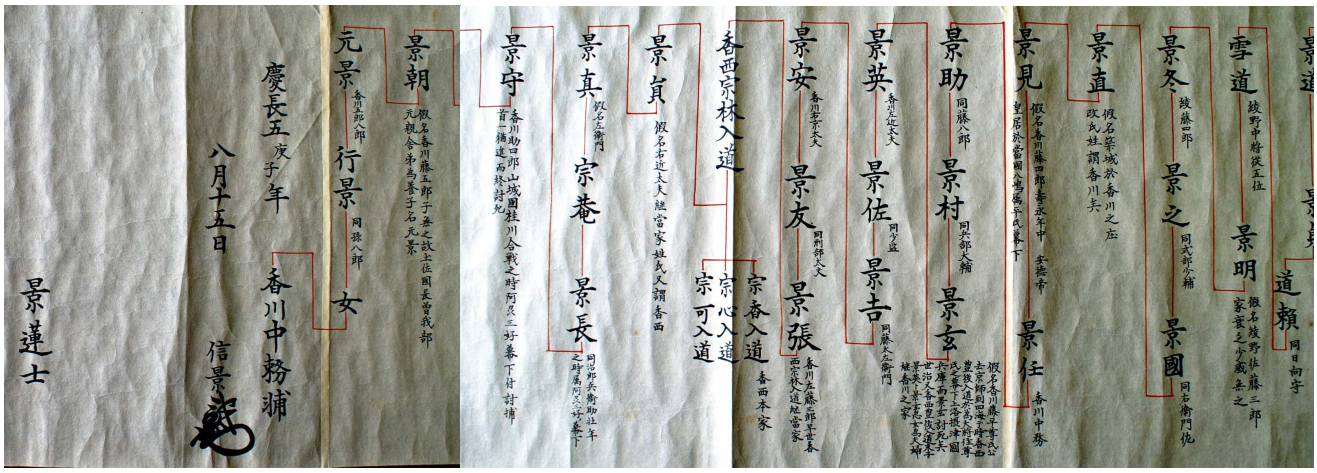
武介

景由　　崇敬元祖　景行天皇以景之字為實名上字及中年圓融院成官仕弘名於近國矣

景雪　　假名綾野中納言天元三八月叙正三位　始藤原氏

景倶　　假名　綾宰相相従三位

景道　　綾野左近将監
景貞　　同兵部少輔――――――貞元　同蔵人
道頼　　同日向守



雪道　　綾野中将従五位
景明　　假名綾野佐藤三郎　家衰退少依無之
景冬　　綾藤四郎
景之　　同式部少輔
景國　　同右衛門佐
景直　　假名築城於香川之庄　改氏姓謂香川矣
景見　　假名香川藤四郎　壽永年中(1182～1183)安徳帝　皇居於當国八嶋属平氏幕下
景任　　香川中務
景助　　同藤八郎
景村　　同兵部大輔
景玄　　假名香川藤平尊氏公去京師到四海　于時香西豊後入道於為大将住尊氏之幕下上洛
　　摂津國兵庫而景玄討死矣世治又香西豊後入道末子景英ト景玄息女為夫婦継香川之
　　家
景英　　香川左近太夫
景佐　　同少監
景吉　　同藤太左衛門
景安　　香川右京太夫
景友　　同刑部太夫
景脹　　香川左藤三郎早世　香西宗林入道継當家
加西宗林入道――――――――(※　景員へ直結)
　　宗香入道　　香西本家
　　宗心入道
　　宗可入道
景員　　假名右近太夫継当家姓氏又謂香西
景真　　假名左衛門
宗菴

景長　　同次郎兵衛助壮年之時属阿州三好ノ幕下
景守　　香川助四郎山城國桂川合戦之時阿州三好幕下付討捕首一猶進而終討死
景朝　　假名香川藤五郎子無之故**土佐國長曽我部元親舎弟為養子名元景**
元景　　香川五郎八郎
行景　　同孫八郎
女
香川中務輔

慶長五庚子年(1600)　　八月十五日　信景　花押
景蓮士

信景年齢七十三而肥後国ニ而病死ス　法名通庵真栖

3　香川中務輔信景家系図の要点

3.1　讃留霊王伝説

本居宣長の古事記伝に「讃留霊王伝説」が収録されている。「讃岐国鵜足郡に讃留霊王と言う祠あり、それは彼の国に讃留霊記と言ふ古き書ありて記せるは**景行二十三年、南海の悪しき魚の大なるが住みて**、往来の船を悩ましけるを、**倭建命の御子**、此の国に下り来て、討ち平らげ賜ひて、**やがて留まりて国主となり賜へる故に、讃留霊王と申し奉る**、それを**綾氏和気氏等の祖**なりと云ことを記したり・・・」

3.2　『香川叢書第三』の「讃留霊公胤記」

『香川叢書』の解題に、「讃岐の古伝説の一つに**讃留霊公の悪魚退治**の物語がある。讃留霊公胤記は、其の悪魚退治の顛末と、霊公の子孫が当讃岐に繁栄した事を述べたものであって、本書は**其の伝説の異本を集めたもの**である。初の嶋田寺本と豊原道隆寺本が其の公胤記であって、次の讃留霊記、南海通記文以下は讃岐大日記・三大物語・全讃史・西讃府史・讃陽綱目等諸書に記された悪魚退治の伝説のみを挙げて参考に資したものである。」（香川郡安原村上原準一氏蔵）とある。

冨士原伸弘氏(詫間電波工業高等専門学校)『讃留霊王伝説についての考察』は、「現時点で成立年が判明しているものを年代順に並べてみると、**・・・最も古いものでも江戸時代を遡ることが無く、原伝承を探るのは困難である**。」と報告している。

1	承応元年	1652 年　友安盛貞	『讃岐大日記』	
2	享保三年	1718 年　香西成資	『南海通記』	「讃留霊記」
3	享保二十年	1735 年　書写	嶋田寺本	「讃留霊公胤記」
4	明和五年	1768 年　菊池黄山	『三大物語』	
5	文政十一年	1828 年　中山城山	『全讃史』綾君世紀	「霊王記」
6	安政五年	1858 年　丸亀藩京極家	『西讃府史』	

7	不明	不明	豊原道隆寺本	「讃留霊公胤記略」
8	不明	**詳細不明**	**中尾本**	**「異本讃霊記」**
9	不明	詳細不明	『讃陽綱目』	

3.3　香川中務輔信景家系図（中尾本『異本讃留霊記』）の書き下し

冨士原伸弘氏の『香川叢書』所収の漢文体書き下しの、**「異本讃霊記」と香川中務輔信景家系図の内容が類似している。転記ミスの範囲内と考える。香川中務輔信景家系図の成立が慶長五庚子年（1600 年）**であり、**『成立年詳細不明　中尾本「異本讃霊記」』が最古の記録となる。**

3.3.1　中尾本『異本讃留霊記』の書き下し

冨士原伸弘氏（詫間電波工業高等専門学校）『讃留霊王伝説についての考察』より転記

1　**人皇十二代景行天皇の二十三年**、西海土佐の海中に一の**大魚有り**。
2　其の姿鱣の如し。
3　去来電に似たり。
4　西海の四州を回り、波瀾昇降せしめ船舶を砕き、而して**人肉を食らふ**こと勝て計ふべからず。
5　玆に因て都鄙の往来、貢物の運送、已に断絶す。
6　事叡聞に達す。
7　故に大魚を戮せんと為しめ、屢々官兵を彼の地に差遣し、越に之を殺さんと欲するに、却って害を得る。
8　天皇、**小碓皇子**に詔して曰く、「汝速やかに西海に到り、大魚を戮し人民を穏やかにすべし。」
9　皇子答へて曰く、「**我が男有り**。今年十有五。強力人に邁く。号けて**霊子**と曰ふ。請ふ之を以て吾に代へん。」
10　天皇曰く、「善也。」
11　是に於て霊子十日程経て土佐に到り、兵士を所々に置いて、大魚の所在を見せしむるに、猶ほ土佐の奥海に在り。
12　然り而して波高く風烈しめ、船行くこと能はず。
13 故に霊子、其の時節を待つ。
14 爾後大魚土佐自り阿波の鳴戸に周り、同二十五年孟春西海に下り、同年三月朔讃岐椎の途の海に来たりて、往来の船舶を砕き、官物及び**人肉を食ふ**。
15 同四月三日、霊子、讃岐に踰えて、巧匠をして新たに艇艡を造らしめ、諸方居る所の官軍召すこと一千余人。
16 同五月五日辰の刻、艤ひしめ大魚に向かふに、大魚呼吸しめ海中を震動す。
17 而して口を開きて艇艡を呑む。
18 霊子官士多く魚胎に入り、酔臥すること死るが如し。
19 而して霊子独り身心悩むこと無し。
20 終に魚胎に在りて、火を出て之を焼く、且つ剣を以て魚肉を破るに、大魚の逼悩言ふべ

からず。
21 而して霊子、胎中より出て、天道を礼するに日光赫奕たり。
22 乃ち魚屍に乗りて、讃岐の福江の湊に到り、魚屍を陸地に寄せ、胎中の官兵を出す。
23 時に汀濱に一人の童子有り。
24 瓶水を持ち来て霊子に捧ぐ。
25 其の水美味にして甘露の如し。
26 身心清潔。
27 霊子童子に問ひて曰く、「此の水何くに在るや。」
28 曰く、「是れ則ち安庭の水なり。汝安庭に到りて、此の水を酌みて酔臥の官兵に飲ましめよ。皆活命することを得るべし。」
29 霊子之を聞き、行きて之を酌み官兵の口に入るるに、即ち醒寤を得たり。
30 此の時邑人来て大魚の肉を截分す。
31 霊子之を喜ぶこと甚だし。
32 而して后官軍を率て、鵜足津の邑に入る。
33 時に同月十五日午の刻なり。
34 憶ふに是れ童子は、日光大士応化の身、即ち横汐明神なり。
35 而して後海上に往来の煩ひ無し。
36 霊子、京師に帰らずして、鵜足津に居住す。
37 官兵の中勇力の者四人を選び、将軍を定めて当国四箇所に居らしむ。
38 所謂井戸の行部、田比の里布、師（黒）田の宇治、坂本の秦霊子。
39 之を四天王と名く。
40 霊子胸間に阿耶の字の點あり。
41 故に綾を以て氏姓と為す。
42 亦霊子諱を讃留霊公と曰ふは、京師に帰らず、讃岐に留まる。
43 故に以て名く。
44 国衙庁官等、此の姓に雑ふべからず。
45 仲哀天皇の御宇八年九月十五日、壽百二十五歳にして薨す。
46 今現に讃留霊天皇と稱す。
47 毎年九月十五日祭礼有り。
48 此の天皇は讃岐の国造の始祖なり。

大魚の姿が「鱣」、行動が「亀」である。「鱣」は「こい・うみへび」である。また退治をするのは小碓命（倭建・おうすのみこと）の子「霊子」である。

3.4　大魚の考察

我国が異民族の侵略を受けるのは元寇が初めてではない。元寇（蒙古襲来）とは、鎌倉時代中期に、大陸を支配していたモンゴル帝国（元）及びその服属政権となった高麗王国によって二度に渡り行われた対日本遠征の呼称である。一度目を**文永の役**(1274)、二度目を**弘安の役**（1281）という。主に九州北部が戦場となった。平安中期から末期にかけて、新羅・高麗・南蛮等、様々な異民族が、たびたび九州に攻めてきている。侵略は北九州のみ

ならず、薩摩大隅に及んでいる。『太宰管内志（大宰府管内誌）』『類聚三代格』『日本三代実録』『百錬抄』『日本紀略』『扶桑略記』等に記録が残されている。

大魚は比喩であり、「侵略者の軍船」と理解すべきである。**人皇十二代景行天皇二十三年の記録**が『**二宮大塩八幡大神宮**(福井県越前市国兼町字榊山 22-2)**旧記**』に残されている。**蒙古来攻の記録**である。「**景行天皇の二十余年、蒙古及び越夷の大軍**が角鹿に着船した。天皇は**おうすのみこと**を討手の**大将軍**とし、**吉備武彦**を**副将軍**として、**越の国**へ派遣した。」とある。

ヤマトタケルノミコト（72 年頃～113 年頃）の**諱（いみな）が小碓尊（命）（おうすのみこと）**である。第 12 代景行天皇の皇子・第 14 代仲哀天皇の父である。

大塩八幡宮

4　まとめ

① 系図冒頭に讃留霊王の大魚伝説が記録されている。大魚伝説は比喩であり歴史的な事実として解読すべきである。**人皇十二代景行天皇二十三年の蒙古来攻の記録と考える。**
角鹿に着船し、同時に西海土佐へも軍を進めていたと考えられる。

② 香川氏系図は、香川平太夫景葛家系図と 2 種類を入手分析した。

③ 依志君迄は『群書系図部集　巻六』収録の「綾氏系図」と同一である。

5　追記

11 月 5 日に熊山遺跡群調査研究会の研修旅行で、鹿島歴史民俗資料館(島根県松江市鹿島町名分 1355-4)の企画展『**海の記憶～波涛を越えた人々～**』を見学した。驚いたのは**日本地図を全て南北逆に展示していた**ことである。**南北逆に展示することにより渡来人の渡来ルートを明確に認識する**ことができた。『大魚伝説は比喩であり歴史的な事実として解読すべきである。**人皇十二代景行天皇二十三年の蒙古来攻の記録と考える。**角鹿に着船し、同時に西海土佐へも軍を進めていたと考えられる。』との発想は、**南北**逆に展示された日本地図に基づくものである。

富山県作成の日本地図

6　参考文献

①『資料目録（続編)』昭和 58 年　鎌田共済会郷土博物館

②『姓氏家系大事典』大田亮　昭和 38 年　角川書店

③「**綾氏系図**」『群書系図部集　巻六』昭和 60 年　続群書類従完成会

④『讃留霊王神社』　http://www.geocities.jp/seiji_maturi/hanzan1.html

⑤『**讃留霊王伝説についての考察**』富士原伸弘　詫間電波工業高等専門学校紀要第 37 号 2009　詫間電波工業高等専門学校

⑥『香川叢書第三』昭和 47 年　香川県

⑦「**第四部　伝説による越前若狭の古代**」『**年表で見る越前若狭の古代**』小辻幸雄　1980 フェニックス出版

※　小辻幸雄の典拠は『**越前若狭の伝説**』**杉原丈夫　昭和 45 年　松見文庫　P618** である。
「**伝説の内容を正しく知るためには、必ず典拠を参照すべきである。**」としている。